DEVIL SURVIVOR 君と共に

九頭龍隼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤＥＶＩＬ　ＳＵＲＶＩＶＯＲ　君と共に

【Ｎコード】
Ｎ２６２６Ｚ

【作者名】
九頭龍隼人

【あらすじ】
『長年の夢だった師範代になれた翌日、俺の生活は全てが変わってしまった』
幼少時から習い続けた流派で師範代に任命された日、数年前まで同居していた従兄のナオヤから「明日合わないか」と連絡が来る。懐かしい顔が目に浮かび、二つ返事で快諾するが、それが俺と仲間たちの運命を変えることになるとは思ってもいなかった……
この小説はアトラス様より発売になっている、任天堂ＤＳソフト、

デビルサバイバーの二次創作作品です。独自解釈、独自設定が多々ありますが、これが苦手な方はご遠慮ください。

原作であるデビルサバイバーを知らなくても読めるように工夫しますが、原作をプレイしてから読まれた方が、より楽しめると思います。

PROLOGUE

――汝、人の身に生まれし者よ

――人は今や、力ある種。

――なれば人よ、汝は向き合わなくてはならない。

――己が持つ力と、運命に――

―渋谷　宮下公園―

『もしもし？』
『よお、ユズ、さっきナオヤさんからメールが来てさ、明日会わないかって』
『ナオヤさんって『彼』の従兄だよね？私も明日暇でさ……』

――平穏な日常に在りても、定めは刻々と迫り来り。

――其は裁きなり。

――かつて汝ら人の子の言葉を分かち、驕れる力を砕いたる雷なり――

――――――――――――――――――――

――――――――

―六本木―

『はは……やっぱりダメだわ。ったく、『アヤ』さんは何だってワ

タシのこの歌を預けたんだか……』
『焦らなくていいさ。『歌こそは境界のない言葉』お前なりの歌い方で歌い上げりゃいい……』

――されど。

――神自ら在らざる限り、全ての物は闇をも抱く――

―六本木ヒルズ―

『これで『召喚の器』は完成しました……どうでしょう、このまま我々にお力をお貸し頂けませんか……？』
『……俺は何もしちゃいないさ。『原子の共通言語』が奴等を喚んだ……それに俺は『神』が苦手でね』

――人よ、真に己で在りたいならば、汝は自ら戦わなければならない

――汝の持てる闇……『悪魔』と――

――汝、戦の定めを負う者よ。挑む意志あれば、その名を述べよ――

「鷲尾龍也、お主の実力を認め、林崎神明夢想流師範代に命ずる」
「っは！謹んでお受けいたします！」

「レイ、なんとか師範代になれたよ……ってお前には師範代の意味はわからないか」
「コ～ン」
「はは、喜んでくれるのか？ありがとう……あれ、ナオヤからメールが来てる……明日合おうだって。レイ、久しぶりにナオヤと会えるみたいだよって、レイはナオヤに合うのは初めてか」

「コンコン」
「性格はそれほど良い奴じゃないけど、まあ悪い人じゃないよ。ちょっと変わってるけど」

――神曰く、七つの昼夜をもって創りしこの世を、七つのラッパの響きにて滅ぼさん。

――意志ある者よ、その瞳に映りし『数』を恐れよ

――残されし、その昼夜の数を――

PROLOGUE（後書き）

１２月１０日、修正しました

待ち合わせ

八月中旬、高校二年の夏休みが終わろうとしている。

「暑いね、レイ」

「ク～ン」

一人の少年と一匹の狐がそんな会話をしている。

少年の方は大きなヘッドフォンをつけて（何故か針金のようなものがネコミミ状になっている）おり、青い髪に中性的に整った顔、二の腕までの長さしかない半端な服を着ており、その足元には小さな子狐が一匹、少年の靴の上に腰かけていた。

彼らの名前は鷲尾龍也と雌の子狐のレイ。何処にでもいるごく普通の高校生だ。

何、大都会東京で狐連れてネコミミヘッドフォン付けてる奴を普通の高校生とは言わないって？ハッハッハ、御冗談を。

確かに彼は林崎神明夢想流の師範代と言う、高校生にしてはあり得ない立場の持ち主だが、剣術の腕前と格好を除けばごくごくありふれた普通の高校生だ。

あち～と言いながら周りを見渡すと、既に帰省の始まった渋谷の街は、何時もより人が少なく見える。まあ、特に人が減ったとか、そんな事は無いのだが……

さて、夏休みで高校生……と言えば何が思い出されるだろうか？

ひと夏の思い出、キャンプ、友達と行く海……楽しい事が沢山のように見えるが、実は高校生……いや、学生には忘れてはいけない忌々しい存在が一つだけある。そう、その名も『宿題』だ。これまで何人もの学生が宿題を『まだ日にちがあるからいいや！』と放置し、夏休み終盤に家に缶詰め状態になった事だろうか。（ちなみに作者は宿題をもらったら学校で終わらせていた人です）夏休みの中盤と言えばお盆が重なり、暇な時間を過ごしている学生も多く、そ

の期間に宿題を終わらせる学生が多くなる。が、この少年鷲尾龍也はつい昨日まで道場の夏季合宿で宿題の『し』の字さえも終わっていなかった。

「なあミク、どうして東京ってこんなに暑いんだろうね」

龍也は額に滲んだ汗をポケットに入れていた青いハンカチで拭きながら（昔甲子園で某王子が使っていたハンカチではない）足元のミクに尋ねるが、彼女はわからないらしく、首を傾げて龍也の方を見上げていた。

このアホみたいに暑い中、どうして一人と一匹は外に突っ立っているのかと言うと、数年前まで龍也と同居していたナオヤと言う青年が『久しぶりに会えないか？』と、ほざきやがったからである。しかし、この暑いのに外で直射日光に当たっているのは自分離れているから良いとして、レイの体に良くないんじゃないかと考えた心優しい龍也君は、少しでも彼女が涼しくなればいいと、近くのコンビニで氷とミネラルウォーターを購入し、持ち歩いていた彼女専用の水飲み皿に入れ、自分の影で日陰を作り、その中に彼女を入れてあげているのだ。が、それでも都会の暑い空気は変わらず、彼女は体を暑いコンクリートにグテ～っと横たわらせていた。

「お～い龍也！こっちこっち！！」

そろそろやばいな、と龍也がコンビニか何処かへの逃走を図ろうとした直後、聞きなれた親友の声が聞こえてきた。

彼の者の名前は木原篤者（アツジャ）もとい木原篤郎＝（通称）アツロウ。龍也の親友兼クラスメイト。電子機器に強く、彼が愛用のノートＰＣを手放す事は殆どない（学校にも持って来て先生方に呆れられたのは余談だ）

「龍也にレイもお疲れ～いやはや、ナオヤさんも奇特だよなぁ、こんな暑い日に何も外で待ち合わせなんてしなくてもいいのに」

「全くだね。俺は稽古で慣れてるから良いけど、レイは暑くてほれ、グデ～としてるだろ？」

「まあ、俺から言わせて貰えば何でこんな時までレイを連れて来

てるんだって事になるんだけど……学校でも一緒なお前達には普通の事か」
アツロウが学校にノートPCを持ち込むなら、龍也は学校にもレイを連れていくという、ある意味問題児な二人なのだ。
「それで、どうよ夏休みは……って昨日まで合宿だったんだもんな。学校だと毎日顔合わしてるからすげー久しぶりな気もするけど……元気だったか？」
「元気だったよ。合宿逝ってたから何とも言えないけどね」
「お～、流石は龍也。字が違うような気がするけどそこはスル～推奨？」
「推奨」
「ならスルーする。俺なんかやる事無くて家でずっとパソコン叩いてるよ。」
はっはっは！と笑うアツロウを、地面でグデ～としていたレイが冷たい目で見ている。
「レイちゃん、そんな目で俺を見ないで……ごみを見るような眼で見ないで……」
「違うぞアツロウ、この目はダニを見る目だ」
「なお悪いわ！！」
今までの会話を聞いていてもわかるとおり、龍也とアツロウは非常に仲がいい。アツロウにはミクもよく懐いており、時折二人と一匹で遊ぶ事もある。
「いや～、でも良かったよ」
「ん、何が？」
「丁度プログラミングでわからない所があってさ。もう困っちゃって、丁度ナオヤさんに聞こうと……」
「あ～いたいたっ！探したよ～！」
アツロウのパソコンヲタク丸出しの発言は、二人と一匹に馴染みのある声で遮られた。
「おっ、来たなソデコ！」

二人と一匹のが声のした方向を見ると、赤髪で全身をピンクのコーディネートでばっちり決めた青いスカートの女の子が走ってくるのが見えた。
「ソデコってゆ～な！私は柚子！もうっ、いい加減その呼び方やめてよね。あんたのせいでクラスの男子にまでソデコって呼ばれるんだから！」
「へへっ、い～じゃんか！袖子と柚子って字面そっくりじゃん。それに生徒だけじゃねえし。今も真顔で『ソデコ』って間違える先生、割といるぜ？」
「それはアンタみたいなのが『ソデコ』って呼び倒してるからでしょ！」
「ははは、バレたか！」
「はい、二人ともストップな。レイが怖がるだろうに」
この男、レイ至上主義である。
「だってアツロウがソデコってゆーんだもん……」
シュン……としてしまうユズ。これが美少女がやるもんだから結構可愛い。
「うむ、その点についてはアツロウが悪い。後で帰ったら尻木刀30回の刑に処す」
「げげ、それは勘弁」
ちなみに龍也はクラスの男子で唯一ユズの事をソデコと呼ばない人物である。そのせいでユズ×龍也が鉄板だという噂が彼等の学校では流れている。ちなみに、アツロウ×龍也も少数派ではあるがいるらしい。本人達が知ったら怒髪天を衝く勢いで犯人探しを始めるだろうから、その主な原因は話さない事にする。
「にしてもナオヤ来ないな……さっさと涼しい所に行って休みたいんだが……」
「え……？あ、そうだ！」
「ん、どうした、ユズ？」
「さっきナオヤさんにあって、急用で来れないからって龍也とア

ツロウに届け物頼まれたの」
「え～、ナオヤさん来れないの？せっかく楽しみにしてたのに……で、届け物って何？」
ＰＣ関連か？それとも暗号化なんかかな？と、一人盛り上がるアツロウを無視し、ユズは鞄から何かをとりだした。
「はい、コレ。も～、鞄重くなっちゃって大変だったんだから」
「ゲーム機……ナオヤがこれを？」
高校生三人にゲーム機のプレゼントとは、ブルジョアめ！
「うん、そうだよ？コミュニケーション・プレイヤーってヤツだよねコレ？ＣＭでみたことあるよ『世界の人と遊ぼう！』ってヤツ」
「ああ、夏休み前にアツロウが学校に持ってきて流石に没収された奴だっけ？」
「うげ、嫌なこと思い出させるなよなぁ……買ったばっかりで一週間没収とか洒落にならないって……まあ、これはソデコも知ってる通りコミュニケーション・プレイヤーだけど呼びにくいだろ？だから略して『ＣＯＭＰ』って呼ばれてる。実際便利だぜ、メールとかブラウザ機能とかあるし、ゲーム機って言うより進化した携帯って感じかな」
「ふぅん、そういうもんなの？ナオヤさんがね『君達に必要なものだ、手放すな』って」
「君達……ああ、だから三台あるのね……でもさ、何で必要なんだ？ＣＯＭＰなら家に行けば……ん？」
アツロウは手に取ったＣＯＭＰを開いて、怪訝そうな声を上げた。
「どうした？」
「何だ……これ？こんなトップメニュー見た事ねえぞ……オリジナルって可能性が高いけど……」
「オリジナルって……自分で作ったって事？そんなこと出来るの？」
「あれ、ソデコ知らね～んだっけ？ナオヤさんはその筋じゃ有名な天才プログラマーなんだ。こんなモン、作ろうと思えば朝飯前っ

て奴だよ」
「へえ、知らなかった……ナオヤさんってそんなに凄い人だったんだ……」
「まあな……おっと、フォルダ開かねえや。プロテクトでもかかってんのかな……」
「プロテクト？それって他の人に勝手にいじられないようにするヤツでしょ？じゃあ中身は見られないじゃない」
「まあ、普通ならそうだけど、アツロウなら大丈夫だろ」
龍也の言葉を聞き、待ってましたとばかりに背中の鞄からノートPCを取り出すアツロウ。
「へへ、それじゃ龍也の期待にこたえますかね。やっぱノートPC持って来て良かった～」
ノートPCにCOMPをつなぎ、カタカタと何かを入力し始めた。
「はぁ！？ちょ、ちょっとアツロウ！何やってんの！？」
「何って、ハッキングしてフォルダこじ開けるんだよ」
「こじ開けるって……ナオヤさんに怒られちゃうよ？」
「別に良いんじゃね？プロテクトかけたって事はアツロウに『こじ開けてみろ！』って言ってるんだろ……任せたぜ、パソコンヲタク！」
「龍也、俺にやる気出させたいのか落としたいんだかはっきりしてくれよ……まあ、竜也が言った通り、師匠から弟子への挨拶代わりみたいなもんさ」
「ぜ～んぜんわかんない。何そのめんどくさい師弟関係……」
呆れるユズを無視してキーボードをたたき続けるアツロウ。そして数分後……
「おっしゃ、開いたぜ。さてと、今回はどんなプログラム何でしょうかっと……にっひっひ♪ワクワクするよな」
「し・ま・せ・ん！そんなのアツロウだけです！」
「とりあえずメールだけ見られるみたいだぜ。ほれ、お前らの分」
「サンキュ～アツロウ。お前に上級パソコンヲタクの称号をやろ

う」
「いや、いらないから。何その名誉なのか不名誉なのかよくわからない称号」
などと戯言を吐き続けるアツロウを無視してＣＯＭＰを開くと、一通のメールが着信していた。

ＦＲＯＭ　　時の観測者
ＳＵＢＪＥＣＴ　ラプラスメール

おはようございます。
本日のニュースをお伝えしマす。

?１６時頃　渋谷区青山アパートにて男性が【死亡】肉食獣に喰い荒されたような跡

?１９時頃　港区青山、青山霊園にて大きな【爆発】原因は不明

?２１時頃　東京全域にて大規模な停電

みなさま良い一日ヲ。

……悪戯……いや、ナオヤに限ってそんな無意味な事はしないよな……
「１６時頃、渋谷区青山、男性が……死亡！？肉食獣に喰い荒された……！？何のニュース、これ……気味悪い……」
「……ところどころにカナが書いてあるな」
「ちょっと、ツッコム所違うでしょ！？」
「……まあ、さっきのは冗談としても、流石に気色悪いな……」
「東京全域で停電とかも書いてあったよな……何だろこれ。本日のニュースって言っても今日はこんな事起こってねーし……ナオヤ

さん、どうしてこんなファイルにプロテクトかけたんだ？」
三人とも意味が分からないようだ。
「もしかして暗号とか！？青山……そうだ！青山と言えばナオヤさんのアパートもそのあたりだったけど……関係ないか」
「もう良いよ、気色悪いってば！ナオヤさん、アツロウが必ずＣＯＭＰいじるの知ってて悪戯したんじゃないの？」
両手で自分の腕をさするユズ。ホントに気色悪いのな。
「どうかなぁ……あの人尋常じゃなく頭いいからさ、何か意図があると思うんだけど……」
「……こーゆー事に関しては俺よりアツロウの方がナオヤについて知ってるよな……俺、パソコンについてはさっぱりだから」
アツロウは自分の尻尾を追いかける犬のように数分の間その場をぐるぐる回っていたが、やがて止まって鞄にＣＯＭＰとノートＰＣをしまいだした。
「とりあえず考えてても始まらないから他のプロテクトもこじ開けてみるわ。俺は落ち着ける所に移動するから、二人はちょっと二時間位時間潰してきてくれ」
「了解。で、他のＣＯＭＰはどうする？」
「ああ、持っていっていいぜ。いくつかの機能は使えるはずだから、ついでに試してみてくれよ。じゃあ、後でな！」
アツロウはユズに何かを耳打ちしてから走り去って行った。
ユズを見ると、顔を真っ赤にしてアタフタしていた。
「アツロウは何だって？」
「べ、別に何でもないよ！で、でもさ、どうせ悪戯なのにアツロウってこういう話になると子供みたいだよね」
「ま、十分今でも子供だけどな……」
「ははは、そうだね……ん～っと、どうする？アツロウも時間かかりそうだし、何処かに行って来ようか、ね！」
「ん……そうだな。レイ、おいで」
龍也はレイが自分の鞄の中に入ったのを確認し、ユズと共に渋谷

９０１前を離れるのだった。

ユズとデート？

――新宿　歌舞伎町――――――――――――――――――――

日本最大の繁華街であるこの街は、今日も相変わらずの賑わいを見せていた。

「さてと……何処行こうか？カラオケとか映画？う～ん、アツロウから連絡来るかもしれないからケータイの通じる所が良いよね」

「そうだね……でもユズさんや、どうしてこの暑いのにそんなにテンション高いのかね？」

「だって久しぶりに龍也に会えたんだもん。楽しまなきゃ損でしょ」

「ふ～ん、そーゆーもんかね」

ユズは少し顔を赤くしながら、自分がどれ程龍也を思っているのか、含みを持たせた言い方をする。が、我等の主人公はその程度の含みを持たせた言葉では相手が自分にどんな思いを寄せているのかなんて読みとる事は出来ず、あち～あち～と連発しながらまわりをキョロキョロと見わたすだけだった。

「……馬鹿」

「ん？何か言ったか？」」

「ううん、別に」

「そうかい……お、ちょっとユズ、あれ見てみろよ」

「え？」

龍也が指差した方向には、奇妙な衣装（橙色の長いコートフード付き）を着た、見るからに怪しげな集団が陣取って、集団の代表らしき人物が壇上で演説を行っていた。

「……で、あるからして、かつてバベルの塔の建設を阻んだ神の

知れんが、今、再び訪れようとしています！」
バベルの塔……確かそんなの出て来る歌なかったっけ……？
「うっわ……何、あの怪しい集団……？」
「宗教団体なんてそんなもんだろ。バベルの塔か……そんな歌なかったっけ？……そうだ！『バベルの塔～に住んでいるちょ～の～りょくしょ～ねんバビル～に～せい～』こんな歌だよ！……って、こりゃバビル二世か」
「……ごめん、全くわからない」
「ええっ！」
「いや、マス〇さん風に驚かれても、知らないのは知らないって……」
俺の時代が古いのか……？と考え込む龍也の耳に、さっきの教祖っぽいのの演説が耳に入って来た。
「さあ、みなさん！我々翔門会と共にネットの世界で世界を再び一つにまとめ……」

「ネットの力だってさ。確かにネットで世界中の人と繋がれるって言うのは凄いと思うけど……はぁもう、何か疲れちゃうよ。龍也は、ああいうの興味ある？」
「全く無いね。俺からすれば形のない神やら仏やらに頼って生きて行くって考えが理解出来ないからさ……結局、ああゆうのに心酔できるのは自分に自信の持てない『愚者』だけだよ」
二人の間に沈黙が訪れる。
「……あ～あ、なんか変な話になっちゃった。龍也、場所変えよ！！」
「そうだね、あれを見てると色々考えちゃうから」
神様なんてそんな存在はいる訳が無い。神がいて、全員に救いを与えてくれるのなら、酷い飢餓で苦しむ人も出る訳が無いし、格差なんてものが出来るはずもない。歴史を見れば神を信じた奴の末路は殆どが悲惨なモノだ。

結果、神などいない。そして形のない『モノ』には頼らない。
それが鷲尾龍也の考え方だった。

「今夜から三日間、ネットの力を信じ、同じ志をもつ人々が、東京に集います。心ある型は参加して下さい。主上を信じ、試練に正しく備えて下さい。その時こそ我々は……！」

去り際に龍也の耳に聞こえた戯言に、彼の機嫌は非常に悪くなるのだった。

――表参道――――――――――――――――――――――――――――――――

歌舞伎町で見かけた愚者（龍也談）達によって悪くなった龍也の機嫌を直す為、龍也とユズ、レイの二人と一匹は表参道でウィンドウショッピングを楽しんで？いた。

「やっぱりこの辺のお店っておしゃれよね～。何て言うか、大人っぽい？中学生のころは原宿ばっかり行ってたけどやっぱりいつかは表参道の似合う女になりたかったんだよね」

「俺は中学の時から道場ばっかだったからそんな事考えなかったよ」

苦笑しながら言う龍也に「あはははは……」と苦笑を返すユズ。
傍から見れば二人は付き合い始めたばかりで相手の事をもっと良く知りたいと思うカップルに見えなくもない。こんな事を言うとユズが顔を真っ赤にして再起動まで時間がかかるから言わないが……

「そんなことより……ね、今の私浮いてないかな？」

「浮いてるも何も、雰囲気にジャストフィットしてるよ」

「え、うそ！やった、嬉しい！」

少々からかいを含みながら返した台詞だったのだが、よほどほめられたのが嬉しかったのか、ユズは顔を少し赤くして両手で頬を抑

えた。
　そんなユズをコロコロ表情が変わって実に女子高生らしい。と、冷静に分析してるのだから、鷲尾龍也という男、女性の扱いに手慣れている。
「手慣れてねえよ」
「え、どうしたのいきなり？」
「いや……何か不名誉な事言われた気がしたんだが……」
「？まあいいや。でもさ、表参道と原宿って全然イメージ違うじゃない？なんかさ、原宿って言うより青山に近いイメージが……」
　青山ねえ……最近その名前をどこかで聞いたような……！！
「……ねえ、龍也、今って何時だっけ……？」
「……１６時３０分……あのメールの時間だよな……」
　ユズも同じことを考えていたようで、二人揃ってお通夜のような雰囲気になってしまう。
「……龍也も同じ事考えてた？」
「……ああ」
「やっぱり……あの『肉食獣に喰い荒された』ってメール……確か場所も青山だったでしょ？丁度時間も今頃だし……」
「……考えすぎでしょ。そんな未来予知のメールなんて……まだ空歩けたり透明人間になれるって方が現実的でしょ」
　龍也がその台詞を呟いた途端、二人の目の前をサイレンを鳴らしたパンダカーが通り過ぎて行った。
『……』
　二人の間に、またしても沈黙が訪れる。
「あの方向……青山の方だよね……？」
「まあ待て、ここは落ち着いて素数を数えるんだ……」
「龍也、私は真面目に聞いてるんだけど……？」
「す、すいません！！」
　顔には天使のような笑みを浮かべながらも、目は笑っていない。
　余談ではあるが、後日龍也は表参道で青山方面にパトカーが走っ

て行った原因よりもユズの方が怖かった。と語っている。
「ねえ、ナオヤさんのアパート、青山なんだよね……？見に行かなくても……大丈夫かな？」
少し前まで顔一面に笑顔を浮かべていたユズの顔が、得体のしれない『モノ』への恐怖に彩られているのを見て、何かあった時は俺がアツロウとユズを守る。と、決心を固める龍也であった。
「……行ってみるか？」
「う、うん……ちょっと怖いけど、大丈夫」
そうして二人は、覚悟を決めて青山のナオヤのアパートに向かうのだった。

ナオヤと遭遇

――青山　住宅街――――――――――――――――――――――――――――――――

二人が辿り着いた先は間違いなくナオヤの暮らすアパートだった。現場となったナオヤのアパートにはよくドラマの事件現場とかで見られる黄色いテープが貼られていて、それを遠巻きに見物する野次馬であふれかえっている。……次の瞬間、人ごみを気にするでもなく、龍也の元へ近づく一つの人影を見つけた。

「あ……ナオヤさん！？」

「……龍也、驚いたな……こんな所でどうした？」

龍也の登場にナオヤは本気で驚いている。

「久しぶりに会うのにこんな出会いはショッキングだけどね……まあ、無事でよかったよ」

「無事？……ああ、アパートでの事件の事か」

「決まってるじゃないですか！そうだ、大体アレなんですか！？ナオヤさんが変なメール読ませるから、不安になっちゃったんですよ！」

「……そうか。……そうだな、すまない。怖がらせる気はなかった」

（ナオヤが素直に謝るとは珍しいな……）

「……喰われた男はお前達と同じ高校生だ。俺の隣に住んでいた……な」

「っな！？」

「喰われたって……ウソ！！じゃああのメールに書かれてた事が本当に起こったんですか！？だってあのメールが来たのは、事件が起こる前で……あれ！？龍也、どうゆう事？」

（……そんなこと俺に言われても……）
事件が起こる前なら悪戯だと軽い気持ちで言う事も出来た。だが、実際にこう事件がメールに書いてある通り起こってしまうと……
「未来予知……とか？」
出来るなら間違えであって欲しい。一縷の望みを込めてナオヤをみるが……
「……たいしたものだ。お前の意外性には驚かされるよ」
ニヤリ。と心底嬉しそうに笑うナオヤ。
「普通ならば、俺がメールを送りつけ、そして実際の事件を起こしていると考えられてしまうだろう。流石は俺の従兄だよ」
「……ナオヤが俺の事を褒めるなんて珍しいね」
龍也の記憶にある限り、ナオヤに褒められたのは数年間暮らした中で片手で数えられる位だった気がする。
「ふふ、俺だって褒める所は褒めるさ。龍也、お前達がここに来た理由はわかった。だが、俺達のこの出会いはアノマリー……不規則や変則……本来はあり得ない出会いだ。すぐにアツロウの所に戻るんだな……もうすぐ、始まってしまう」
「始まる……！？何の話をしてるんですか？」
ユズの問いかけにも答えず、ナオヤは二人から視線を外して何かを考え込んでいる。そして、何かに気が付いたのか左手を右手の拳でポンと叩き、マンションの中に入って行く。
テープの前で警官に何か話しかけられていたが、ただの警官がナオヤの論理的な説明に叶う訳が無く、結果ナオヤは自分の家の中に入って行った。
「な、何かナオヤさんって大胆だよね……私なら殺人事件が起こった場所に自分の家でも帰りたくないよ……」
「……俺だってそうだよ……でもナオヤは常人とはちょっと違うからさ」
頭がよすぎると一般人が気にする事が気にならなくなるんじゃないか？と、龍也は本気で考え出した。

龍也そんな事を考えていると、アパートからナオヤが何やら細長い袋を持って出てきた。
「龍也、これをやる」
そう言ってナオヤから渡されたのは正真正銘本物の日本刀だった。
「な、何でナオヤが刀何て持ってんだよ！」
「昨日お前の母親から連絡があって『龍也が師範代に昇進したのよ！！』と嬉しそうに話してくれてな。師範代への昇進祝いだ。本来ならもう少し経ってから渡すつもりだったんだが……まあいい。抜いてみたいのはわかるが、ここで抜くなよ？警察の目もあることだしな」
「あ、ありがとう、嬉しいよ。でも、こんな鯉口切っただけで業物とわかるような刀、何処で手に入れたんだ？」
鯉口を切っただけでその刀剣類のレベルがわかる辺り、龍也もナオヤと同じ変人なのかもしれない。
「龍也、世の中には知らない方がいい事があるんだ……さて、もう時間が無い。二人とも、良く聞け」
「知らない方がいい事ってどうよ？」
「いいか、これから起こる事から目をそらすな。恐れずに立ち向かうんだ。その時こそ、真実の扉は開かれる。運命を……乗り越えろ……」
「おい、シカトすんな！」
「あっ……待って下さいよ！」
ナオヤは龍也のツッコミをスルーし、ユズのと制止も聞かずに立ち去ってしまった。
「行っ……ちゃった……ねえ龍也、ナオヤさん、何か様子が変だったけど……どうしたのかな？」
「ナオヤが変人なのは今に始まった事じゃないけど……確かにいつもより意味が分からなかったな……俺にプレゼントなんて、明日には日本滅んでんじゃないか？」
「あはは……それは言いすぎじゃないかな……？」

事実、龍也は今までナオヤと同居していた数年間、まともなプレゼントを貰った記憶が無い。ナオヤがくれたプレゼントと言えば『ルーン文字の本』だったり、『超難関問題集』といった龍也には必要のないものばかりだった。

『♪♪♪♪♪～』

『！？』

いきなり携帯電話が鳴り、驚く龍也とユズ。着信は龍也の携帯の方で、ディスプレイには『木原アツロ～』と表示されている。

「もしもし、アツロウ？どうかしたか？」

『よう！プロテクトの時方が分かったぜ！お前らのＣＯＭＰも必要だから、こっちに来てくれないか？渋谷の電気博物館前で落ち合おう！』

「お、おい！アツロ……切れやがった……」

プロテクトの解除方法が分かって興奮しているらしい。

「アツロウから？」

「ああ、あいつ興奮してやがってさ。集合場所だけ伝えてさっさと切りやがった」

「あはは……と、とりあえずアツロウと合流しようか？何か行きんありで頭がこんがらがっちゃったけど……アツロウの方で何かわかったのかもしれないし！」

「そうだね……考えるのは後でも出来るか……」

こうして二人は電気博物館に向かうのだった。だがこの時、龍也はナオヤが残したヒントに気が付く事が無かった為、これから起こることがどれほど悲惨なものなのか、想像もできなかったのである。

電気博物館でのファーストバトル

――渋谷　電気博物館前――――――――――――――――――――――――――――――――

渋谷駅から山手線沿いの来た、宮下公園の傍にある高架の西側に、電気博物館はある。ユズと龍也の二人はアツロウと合流する為、電気博物館に急いでいた。

「よお、遅かったじゃないか。何処まで遊びに行ってたんだ？」

入口あたりに立っていたアツロウが二人を見つけて駆け寄って来た。

「ちょっとナオヤのアパートまで……な」

「え！？ナオヤさんに会って来たのか？」

「あ、うん。えっとね……」

龍也達がナオヤに会ったという事で、明らかに不満げなアツロウにユズが青山で起きた事件の事を話しだすと、アツロウは次第に真剣になって行き、話し終わる頃には頭がこんがらがっているようだった。

「おいおい、何だよそりゃ。あのメール、本当に当たったって言うのか？つーか何でナオヤさんに会った時に俺を呼ばないんだよ。そしたら色々聞けたのにさ……」

「ごめん、色々あったからさ、こっちも慌てちゃって……」

「ん……まあいいよ。ユズが慌てて、龍也が宥めてる絵がよく見える。流石の龍也もそんな事が起こったら冷静じゃいられないだろうしさ……」

実際の所、慌ててはいなかったが冷静さは少々失っていたかもしれない。その証拠に龍也の頭の中は先程ナオヤから渡された日本刀の事で頭がいっぱいだった。

（……ナオヤがくれたこの日本刀、鯉口を切っただけでわかったけど、これはかなりの業物だ……もしかしたら師匠の持ってた刀……銘は何だっただろうか？覚えてはいないがあれもかなりの業物だけど、この刀には勝てない……ナオヤがこんな刀を持っていたのも驚きだけど、もっと驚きなのはこれに刃が入っていて真剣だという事だ。この平和な日本社会で真剣なんて絶対に使わないのに、ナオヤは俺にこれを渡した……つまりはこの刀が必要になるって事か……？あ～もう、訳が分からん！！）

苛々して頭をガシガシを掻き毟る龍也に、アツロウが声をかけてきた。

「でさ、今ユズと話してたんだけど、いくらなんでもＣＯＭＰのメールが未来を予知してるなんてあり得ないだろって話をしてたんだけどさ、お前達こそ、ナオヤさんの悪戯に引っかかったんじゃないのか？」

「その疑問は至極もっともだけど、実際に死人もでてるし、ナオヤはそんな悪戯するようなタイプじゃないだろ？」

「う～ん、そう言われるとそうだけど……でもナオヤさんも人間だから、悪戯位するかもしれないぜ？」

「でも、本当に人が死んでるんだよ？警察だって来てたし……あれが悪戯だとは……考えられないなあ……」

実際に現場を見てきた二人と、見ていないアツロウの間で温度差があるのは至極当たり前の事だが、アツロウの軽～い態度に、ユズは少々お冠のようだ。

「あはは！だってナオヤさんの話が本当なら、あれは犯行予告じゃないってことだろ？だったらマジで見たいでも予知しなきゃそんなこと出来ないぜ？ただの偶然手方がまだ信じられるよ」

「でも……」

「他の事件も起こるかもしれないぜ？」

「他の事件？あ～、そういや爆発とか停電とかも書いてあったな。確かにあのメールが本当に未来を予知してるって言うなら、この二

つも起きなきゃおかしいって事になるけどさ……そんな様子全然ないぜ？」
「え～、だってさあ……」
確かに、高性能だと言っても高々ゲーム機の範疇であるＣＯＭＰのメールが未来を予知しているなど、普通の思考を持つ者には信じられないだろう。事実、あの事件現場を見てきたユズですら、『本当はナオヤさんの悪戯だったんじゃないかな？』と思い始めている。だが、数年とはいえナオヤと住んでいた龍也は、何か薄ら寒いものを背中に感じていた。
「まあい～じゃん！プロテクト外して、ＣＯＭＰの中身を見れば全部わかるって」
「う～ん、何か納得いかないけど、とりあえずアツロウの話をしてよ。何かわかったんでしょ？」
待ってました！とばかりにＣＯＭＰを持って目を輝かせてアツロウは話し始めた。
「ああ、まんまと騙されたよ。ナオヤさんは最初から俺が一人で解析作業をするってわかってたみたいだ。。このＣＯＭＰ三台、常にお互いを監視あっていて、一台じゃプロテクトが解けないんだよ。えっと、ＣＯＭＰには一定範囲にある他のＣＯＭＰを認識する機能があってだな……」
「すまんアツロウ、意味が分からん」
「私も……頭イタくなってきた……説明はいいから早くやってよ！」
「……ったくお前らはよ……」
いい気分で説明をしていた所を邪魔されたからだろうか、アツロウは少し不機嫌そうにしながらも、ＣＯＭＰをイジっている。
「まあいいや。じゃ、プロテクトの解除を始めるぜ？二人とも、自分のＣＯＭＰを起動してくれ！」
『了解』
ＣＯＭＰを起動し、アツロウの解除を待つ間、視線を感じてふと

顔を上げ、辺りを見渡すと道路の向こう側にナオヤらしき人影を見つけた。
（……ナオヤか？）
渋谷のはずれではあるが、人通りが途絶えており、その姿だけが浮き上がって見える。
（……いくら外れだからってこうも人っ子一人いないって少しおかしくないか？しかもなんかナオヤ透明に見えるのは気のせいか……？）
龍也の目に見えるナオヤは、整った顔立ちに表情は無く、それがどこか冷たい印象を与えていた。
「よし、解けた！ＣＯＭＰを再起動するぜ！！」
アツロウがＣＯＭＰを再起動して二人に手渡すと、画面にこんな文字が浮かんだ。
『Ｃｏｍｍｕｎｉｃａｔｉｏｎ　Ｐｌａｙｅｒ
―プロテクトの解除を確認
―プログラムを起動します
―ＯＫ。
―アクマ・ショウカン・プログラム、起動ＯＫ。
―アクマ・ショウカン・プログラムを起動します。
―ｐｅａｃｅｆｕｌｌ　ｄａｙｓ　ｄｅａｄ．
―Ｌｅｔ，Ｓｕｅｖｉｖｏｒ．』
文字が浮かび、ＣＯＭＰから眩いばかりの閃光がほとばしる。その光に視界を奪われた三人が目を開けた時飛び込んできたのは、どう見ても人間には見えない『モノ』だった。
一匹は妖精？のような『モノ（ピクシー）』
一匹は猫顔で頭に麦藁帽子を被った『モノ（カブソ）』
一匹は二足歩行で鎧を着込んだ犬のような『モノ（コボルト）』
「……はあ！？」
ここが映画館なら龍也ももっと冷静で鋭い言葉を発しただろう。だ

が、ここは現実(リアル)世界で、目の前にいる異形の存在は紛れもなく世界に存在しているのである。
冷静沈着、質実剛健を旨とする龍也も、一瞬理解が追い付かなかった。
「うわ……！ＣＯＭＰから……か、怪物！？」
「きゃああっ！な、何これ！？」
三人にとって幸運な事は、三人の中で断トツの戦闘能力を持つ龍也が、二人の悲鳴を聞いていち早く正気を取り戻した事だろう。流石の龍也も正気を取り戻さなければ小学生にも負けてしまう。
「レイ、念の為離れていてくれ」
龍也はレイ肩から降ろし、レイが近くの茂みに隠れるのを見ると、ナオヤから貰った日本刀を袋から取り出して左手に持ち、戦闘に備える。
「あ～あ、窮屈だったわ……！……ここが人間界？ふぅん、この人間達が喚び出してくれたみたいね。さ、早く戦おうよ！勝ったら自由なんでしょ？行っくよー！！」
どんな理屈だそれ……と心の中で呆れる龍也だが、既に気持ちは戦闘の方に向いていた為、余計な事は考えないようにしていた。
「ウフフ……逃がさないから、覚悟してね？ちゃんと死んでくれなきゃ、あたしが自由になれないんだから！」
そう言って妖精(ピクシー)はユズの方に向かって行った。
「きゃああっ！こ、こっち来ないで！やっ！助けて！龍也！アツロウ！！」
三人の中で、一番戦闘能力が低いのは何と言っても女性のユズだろう。龍也は左手に刀を持っているし、アツロウは貧弱そうだとは言え男性だ。あの妖精(ピクシー)がそこまで考えているかはわからないが、ユズを狙って戦力を減らし、残りの二人を三匹で殺すという作戦は、戦術上、最も有効な手だった。
「ユズ、少し離れてろ！！」
龍也がユズを狙ったピクシー目掛けて走りだす。ピクシーには羽

が付いていて、宙に浮いているとはいえ、その進む早さはそれほど速くない。体が小さいので少ししか進めないのだ。
「人の友達（ダチ）に手ぇ出してんじゃねぇ！！」
龍也の持つ日本刀が鞘を走り、ピクシーに向かって鋭い剣撃が飛ぶ。しかしピクシーは危機を察知したのか、慌てて体を捻ってその攻撃を避けた。
「な、何よこいつ……人間の癖にやるわね！」
「ユズ！龍也！ちくしょう！今行く！」
友人二人の危機に、アツロウも戦闘に参加しようとするが、猫もどき（カブソ）に邪魔をされてしまう。
「ギャウッ！人間は悪魔のエサでげす！」
「うお！危ねえな！」
猫もどき（カブソ）の攻撃を辛うじて躱し、猫もどき（カブソ）と対峙するアツロウ。少し左腕に痛みを感じて左腕を見ると、うっすらと三本の赤い線が刻まれていた。躱したと思っていたが、掠っていたらしい。
「おいおいマジかよ……！」
傷に驚いていたアツロウを見て、好機と思ったのか、カブソが追撃を仕掛ける。
反応が遅れたアツロウが『やられた！』と思った時……
「ギャウ！！」
カブソが悲鳴を上げて吹っ飛んで行った。
「ふう、何とか当たったか」
何が起こったか理解できないアツロウの目に飛び込んできたのは、ベルトに鞘を差しこみ、右手で何かを投げた状態でピクシーと対峙する龍也だった。龍也はアツロウが襲われていると見るや、ユズを庇いながらも猫もどきに向かって落ちていた中位の意思を投げつけたのだった。
「さ、サンキュー龍也！それき俺達の攻撃が効いたぞ！……もしかして、ＣＯＭＰの力なのか！？」

「考えるのは後だ。アツロウ、ユズ、気を抜くなよ。こいつら、本気で俺達を殺しに来てるぞ」
『！？』
ユズとアツロウが声にならない驚きを上げる。だが、今までの怪物どもの攻撃を思い出したのか、しっかりと怪物を視界の真ん中に捉えた。
剣術の稽古で、毎回極限の緊張状態にいる龍也でさえ、本当の『殺し合い』では冷静な思考を保つので精いっぱいだ。だが、アツロウやユズ、レイの事を考えると、自分がやらなければならないといった使命感が、今の龍也を支えていた。
「アツロウ、怪我は！？」
「ああ、大丈夫だ！思ったより痛くない！」
少し離れている為、声を張り上げての会話だが、アツロウに大きな怪我がなかった事に安心する龍也。
「ギャヘ……！何で人間の攻撃が痛てえだ？おら、こんなの聞いてねえ……それにおかしいだなぁ……何で人間の癖にこんなに硬てぇだ？」
カブソの言葉に、知らねえよ！と、アツロウは心の中で猫もどきに突っ込んだ。その時……
「ニンゲン、オレと戦ウ！オレ、勝ツ！！」
龍也に向かって棍棒を持った二足歩行の犬（コボルト）が突っ込んで行った。
「く……！！」
『龍也！！』
「任せとけ！！」
龍也を心配する二人を安心させるように声を出してコボルトの振りおろしてきた棍棒を刀で受け止める。
コボルトは龍也より頭一つ大きく、筋骨隆々に見える。が、その攻撃を抑えている龍也には余裕が見て取れた。
（確かに力は強い……けど！！）
剣先を水平にして棍棒を受け止めていた刀の剣先を右斜め下に下

げると、コボルトは勢い余って棍棒ごと前のめりになる。龍也がガラ空きとなったコボルトの胴体を思いっきり左足で蹴り抜くと、コボルトは数メートル吹っ飛んで行った。

（こいつは只の脳筋だ）

本来、龍也の習っている林崎神明夢想流とは、目にも停まらぬ抜刀術で一刀のもとに敵を切り捨てる流派だ。だが龍也が本来得意とする戦闘スタイルは相手の攻撃を利用し、確実に相手にダメージを蓄積させるスタイルだ。

このスタイルは相手が頭の良い相手であれば連続攻撃などを混ぜて来たり、フェイントを織り交ぜて来る為、そこまで通用するものではない。だが、相手がコボルトという知能指数の低い相手ならば、十分通用するのだ。

龍也はコボルトが攻撃をしてくるとわかった時、わざと胴体に隙を作り、そこにコボルトが棍棒を打ち込んでくるかを見ていた。そしてコボルトは龍也の作ったすきに気付かず、頭に棍棒を振りおろしてきた。この事から人体の急所、もしくは生命の急所は知っていても、相手の隙をつく攻撃は出来ない。と判断したのだ。

「龍也……やっぱあいつは半端ねえや」

カブソの攻撃を何とか躱しながら龍也の戦いを見ているアツロウが呟く。武術の経験などないアツロウにもわかる位、龍也の戦い方は洗練されていた。

「グオゥ……オマエ強い！オレ、楽しイ！もっト戦ウぞッ！」

「こっちは迷惑だっつうの！！」

コボルトが起き上がり、龍也に向かって突っ込んでくる。コボルトの棍棒が龍也を捉えようとした時、コボルトは何故か地に伏せていた。

「ド、ドウしテ……」

「唯、斬っただけだ。見えなかっただろうがな」

抜刀術居合　現代では居合は藁を斬ったり、演武的等の見世物のようになっているが、抜刀術の最盛期だった戦国時代は違う。鞘に

収めた刀を、刃を下にして腰を低く構え、鞘走りを利用して抜きながら相手を切り上げる技である居合は、甲冑などで守られていた武士の命を、いとも簡単に奪った。つまり、抜刀術の前には甲冑などは意味を成さないのである。

龍也によって斬られたコボルトもまたしかり。体は甲冑で守られていても、足や腕、太腿、首といった部分は守る物が無い。しかも格下に見ていた人間に傷をつけられたという事で血が上っていたコボルトだ、守りなど気にせずに突っ込んでくる。そんな冷静さを失った相手に対し最も効果的なのが龍也野得意とする『受け』のスタイルであり、抜刀術なのだ。

戦国時代、林崎神明夢想流の開祖、林崎甚助の技は『刀を抜いて人を斬るに、傍らの人にはただ鍔鳴りの音だけが聞こえて鞘を出入りする刃の色は見えず』とまで言われたモノだ。流石に、そこまでの域には達していない龍也だが、素人を相手にするには十分すぎた。

「ぐ、グオゥっ……オレ、負けタカ……喚ビ出しタ人間、勝ッタラ、オレの主人ニナル約束。コレ、契約ッテ言ウ。オレ、知ッテる。オレノ名前、闘鬼コボルト。今後トモヨロシク……」

コボルトは謎の言葉を発すると光となってＣＯＭＰに吸い込まれて消えていった。

「……？」

「や……やった！俺達勝てるぞ！これもＣＯＭＰのお陰なのか……？」

「わからん。とりあえずは相手の攻撃を躱すことだけ考えてろ！後は俺が何とかする！」

そう言ってまだピクシーから逃げ回っていたユズの所に駆け寄る龍也。

「う、うっそぉ、唯の人間が悪魔のコボルトを倒すなんて……」

「生憎、俺は人間でも唯の人間じゃないもんでね」

流石にこんな命のやり取りをする事になるとは思ってもいなかったが、龍也はその髪の色や恰好から、街で不良に絡まれることが多

く、自衛のために技を磨いていたのだ。
「く～、アンタ、人間のくせに生意気！コレでも喰らいなさい！
『ジオ』！！」
「んな！！」
ピクシーの青い小さな体にバチバチと電気が集まり、その電気が龍也に向かって真っすぐ飛んできた。驚きはしたが、その攻撃は避けられるモノだった。しかし……
「ぐ……」
龍也は電撃を喰らって地に膝をついていた。
「龍也！大丈夫？」
ユズが龍也を心配そうに見ている。龍也がジオを避けなかったのは後ろにユズがいたからだ。自分が避ければ、その攻撃はユズに当たる。それだけは自分の体を張ってでも止めたかった。
「ああ……めっちゃ痺れてるけど、何とか大丈夫だ」
「な……何で魔法が直撃したのに生きてるのよ……」
唯の人間が電撃を食らって生きていられるはずが無い。だが、ＣＯＭＰのお陰で少々しびれる程度だった龍也に、ピクシーは恐怖を覚えたのか、標的を龍也の隣で龍也を心配しているユズに変えた。
「こいつさえ殺せば私は自由なんだ……大人しく死になさい！」
「ひ……いやぁ！！」
「ユズ！！待てやぁ！！」
ユズが逃げるのを追いかけて行ったピクシーに追いつき、鞘で地面に叩きつけ、右手の刀を突き付ける。
「ひ！な、何よ、私を殺そうっていうの！？」
「何だ、人を殺そうとして命乞いか？安心しろ、殺しはしないさ。まあ、色々話して貰うけどな」
龍也はそう言って地面に叩きつけたピクシーの羽を鞘で抑え、アツロウの方を振り返る。アツロウはカブソを何とか抑えつけ、何処にあったのか縄で縛りあげてレイと共に引きずって来た。カブソは……気絶してる。

「アツロウ……それは……？」
「いや～、俺がコイツを必死に抑え込んでたら、レイちゃんが何処かから縄持って来てくれてさ。縛り上げて憂さ晴らしに引きずって来たって訳」
「あ、そう……レイ、怖い思いをさせてごめんね。大丈夫だったか？」
「こーん！」
レイは一声鳴くと、また定位置である龍也の肩に飛び乗った。
「な、何であんたがそんな高位の悪魔を従えてるのよ……」
「あ？何だって？」
レイの姿を見て震えるピクシーに剣先を向け、もう一度喋るように促す龍也。傍から見ると完全に『ヤ』の付く自営業の人である。
「だ、だから、何であんたが『九尾の狐』何て高位の悪魔を従えてるのよ……そんなの、私達が勝てる訳ないじゃない……」
「九尾の狐？レイちゃんの事か？」
ある程度本気で落ち込んでいるピクシーの言葉を聞いてアツロウがレイの事を見ると、レイは『私？』と言わんばかりに小首を傾げていた。
『ナイナイ』
こんな無垢で純粋な目をしている子狐が九尾なわけがない。三人の声と心が合わさった瞬間であった。
「本当だって！ってか、どんな存在かもわからずに『飼ってた』の！？しかも九尾の狐が人間に従うなんて……あり得ない……」
「お前、これ以上レイの事を悪く言うと、うっかり手が滑るかもしれないから黙ってろ」
「っひ！」
心底あり得ないといった風に話すピクシーが龍也の恫喝で黙り込む。すると、今度は縛られて気絶していたカブソが目を覚まし、レイを見てピクシーと同じように驚いた。
「アタタタタ……まさか人間に負けるだなんてな……な、何で九

尾の狐がここにいるだ！やめてけんろ～、おいらは食べてもうまくないでゲス！！旨そうな人間がいるだ！そいつらを喰ってけろ～！！」

『……』

「ね！言った通りでしょ！」

ピクシーの勝ち誇ったような声が聞こえる。

悪魔と出会って戦った事よりも、龍也にとって、今日一番の爆弾が投下された瞬間だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2626z/

DEVIL SURVIVOR 君と共に

2011年12月14日00時51分発行